

鷹雄

富永隆一

その押入はどういう訳か、固く閉じられていて、鷹雄がどんなに強い力で開けようとしても、頑なな人間の口のように、一向に開く気配がなかった。永い年月を経て、手垢や落書きで薄汚れた唐紙は、その気になれば簡単に破れるであろう。しかし鷹雄としては、飽くまでも押入の機能としてのその引き戸を、自らの手で開きたかったのだ。そして、内部の構造を窺い、秘められた空間を暴いてみたかったのである。

街を彷徨い歩きながら、鷹雄はひたすらに押入の内部を思いつづけた。(もしかすると、こうして歩いているこの道は、あの押入の内部へと続いているのではないか。そうだとすると、この道の先のどこかに、押入への入口があるのかも知れない。しかし、この三叉路はどちらへ行けばよいのだろうか)

鷹雄の足は戸惑い乱れた。右へ折れることの不安、中央を進むことの焦躁、そして左へ曲がることの寂寥、それらが鷹雄の脳裡で明滅し、回転した。やがて思い迷った末に下された決断は、歩いて来た道に戻るといふ諦めだった。

すっかり日の暮れた夕方、鷹雄は意気消沈して部屋に戻り、ふと押入を見て自分の眼を疑った。そして、暫く体を固くしたまま、その場に釘づけになった。あれほど開かなかった押入の戸が十センチほど開いて、仄暗い内部をわずかに見せていたのだ。鷹雄は慄えながら、恐るおそる押入に近づいた。そして小さな瞳を凝らしたが、そこには暗い闇があるばかりで、何ひとつ形らしいものはなかった。その喩えような不気味さは、鷹雄をして、目眩く暗香へと誘うのであった。

鷹雄はもっとはっきりと内部を見たいと思った。そして、慄える体を努めて抑えようとしながら、戸に指をかけ、勇気を奮って、そろそろと開き、ひよいと頭を入れた時だった。何かが鷹雄

の頭を掴み、ぐいぐいと奥へ引きずりこんだのである。鷹雄はひんやりとした、まるで蒟蒻こんじやくを思わせるようなその感触に、たまらずにぞつと身を慄わせた。それは多くの触角を持ったひとつの肉塊のように思えたが、また押入の内部そのものが鷹雄を包んでいるようにも思えるのだった。たかだか畳一枚ほどの広さだと思っていたのだが、ずるずると引きずられるところをみると、どうやら相当に長い洞穴のように感じられた。俯せになったまま、一体何処へ引きずられて行こうとしているのだろうか。鷹雄は不安に襲われながらも、何の抵抗も出来ないまま、ただ黙々と恐怖を甘受しているほかなかったのである。

悪夢はどのくらい続いたのであろうか。一時間、それとも二時間、いや、夢の時間の感覚が曖昧なように、もはや押入の内部では意識が鈍磨しているのだった。そこでは、時は忘れられた記憶のように、何処かへ飛翔してしまっただけである。引きずられながら鷹雄は、自分の肉体から重量感が薄れていくことに、おぼろ気ながら気がついた。もしかするとこの感覚は、死の淵へと流れゆく、生との訣別の際に生じる、幽暗の世界を彷徨う感覚ではないかと思われてくるのだった。神社の樹々が風に揺れて、葉がざわざわと触れ合い、晩秋の夜は冷気を漂わせて心寒い。鷹雄を訪ねた友人は、彼の部屋に入って首を傾げた。何度も鷹雄の名を呼ぶのだが、返事をしないのだ。もう一度と思い、口を開けようとした時だった。鷹雄の後ろ姿が、熱湯を浴びた角砂糖のよううにみるみる形を崩し、ただ大きな眼の玉だけが、畳の上で人懐かし気に、その友人を見つめていたのである。